フ ラ ン ス 語

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

１　前　　文

令和３年度大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）の「フランス語」は，昨年まで実施された大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の枠組みを受け継いだ『筆記』試験を課し，リスニングテストは実施しないという方針の下，作成，実施された。

試行調査問題が作成され，模擬試験の受験が可能であった「英語」と異なり，事前の具体的な情報が与えられなかった「フランス語」の試験は（他の英語以外の外国語と同様），受験者に多少なりとも不安を与えたものと推測されるが，詳しくは後述するとおり，形式，内容ともにほぼセンター試験を踏襲した形であったので，結果的には受験者も大きな混乱なく試験に臨めたのではないか。

テスト結果は，受験者数88名（前年度121名），平均得点は100点満点換算で64.84点（同69.20），最高100点，最低15（同100点，24点）であった。こうした結果に加えて，標準偏差からも，センター試験から逸脱するものではなかったことがうかがえる。

出題形式については，幾つかの変更が行われた。まず，センター試験の第２問で踏襲されていた「同意文の選択」問題がなくなり，かわりに従来，第３問で問われていた「書き換え」問題が出題された。次に第３問では，「書き換え」問題にかわり，従来，第４問で問われていた文法問題が出題された。第４問は，語彙の知識を問う問題に特化された。第６問には，従来，第８問で出題されていた整序作文問題が配置換えをした。

このように，幾つかの「再構築」は行われたが，内容に大きな変化はなく，第１問の発音問題，第５問の対話文完成問題は，出題順も内容も従来どおりであり，また第７問のＡ，Ｂに分かれての出題形式，いずれも実際の運用場面を想定した内容や，第８問における読解力が問われる長文問題も，従来どおりであった。

報告の方針

今回の報告は，上記の点を踏まえ，次の４点を分析の中心とする。

⑴　受験者の実力差を判定できる試験となっていたか。知識があり，深く考えた結果，不正解になってしまうことがないか，ということを特に検討したい。少人数の集団が対象であるだけに，その点に関しては大人数の科目以上に要求が強くなるが，御理解を賜りたい。

⑵　特定の要素に偏らない，総合的な学力を問う問題であったか。

⑶　高等学校の学習範囲から逸脱しない問題であったか。

⑷　フランス語圏滞在経験などが解答の可否に大きく影響していないか。

２　試験問題の内容・範囲など

第一外国語としてフランス語を選択学習する高校生の学習環境の変化（学習時数の減少）を考慮した問題作成を希望している。

若干の変化があったが，主な形式と内容はともにほぼセンター試験を踏襲した形であった。

第１問　フランス語におけるつづり字と発音間の規則性を理解しているかを問う問題である。基本ルールを問う問題に限る傾向は望ましい。

問１では母音の組合せの音の例外を問う問題。問２は母音の発音を問う問題だが，その選択

肢は全て英語経由でカタカナ語化している単語であり（faux amis の一種），日本人学習者の誤った思い込みを指摘する注意喚起問題であったと言えよう。問３，問４はいずれも語末の子音を発音するかどうかが出題された。出題語はどれも基本語で解答は難しすぎない。

問５には毎回リエゾンに関して出題される。今回は「普通名詞主語と動詞間ではリエゾンしない」②が正解で，基本的な出題であった。

第２問　従来の第３問Ａで，発音に加えて，形容詞の変化，派生語の知識，動詞の活用などを扱ういわば総合的な文法問題である。問１は過去分詞の形，そして３問続けて派生語を問う問題（問２は形容詞から副詞，問３は動詞から形容詞，問４は動詞から形容詞），問５は形容詞の女性形を問うものだった。取り上げられている単語のレベルは中等教育のフランス語学習に十分適合していると思われる。

第３問　文中の空所に適語を入れる形式で，文法や語法の理解度を測る問題である。

問１は，動詞の前に入る代名詞の形を問うもの，問２は前置詞のある関係代名詞，問３は従属節での法・時制を問うもの，問４は状況に応じた冠詞使用，問７は文頭の疑問詞を問う問題だった。

問５は移動を表す動詞に続く不定詞（pourの省略）が出題された。使われているrécupérerになじみがなくとも文法的に解答できる面があるとはいえ，特別な表現なのかとまごつく問題だった。基本動詞repartirの理解を問われた。基本事項を扱っている適切な問題であった。

第４問　引き続き文中の空所に適語を入れる，第３問と同じ形式で，語彙の理解度を測る問題に特化している。

問１はaller bien との同意語，問３はemprunterとの同意語を問う出題。問２と問４は熟語を問う問題，問６は２文をつなぐ接続詞が出題された。学習者が混同しがちな語彙への注意喚起が出題され，良問だった。

問５についてはいささか評価が難しいが，理解の深さを測る良問だったと言うべきか。選択肢の４語とも基本語とはいえ経験値の低い学習者には厳しい出題であったからだ。①ennuyée（正解）と②ennuyeuseの２語は辞書の訳語は似ているのに方向性が異なる，という扱いにくい語で，修飾する名詞にどのように働くのかの理解が問われた。

第５問　対話文を完成させる問題であり，４技能の総合的な育成が求められている中で，会話体としての出題にもますます工夫がされていることと推察する。

ただ，問５の③（正解）にあるchanger les idées は，経験値の低い学習者にとって捉えにくい表現だった。「フランス語圏滞在経験などが解答の可否に大きく影響していないか。【報告の方針（４）】」という点で大きく逸脱するものではないが，今後も，基本語という手掛かりから受験者が理解を進められるレベルでの出題に留めていただけるようお願いする。

第６問　和文仏訳で，自らの考えを述べる自由作文の前段階として文法や構文を中心とした作文力を問う問題である。並べ替えの語あるいは語句の単位は６個，問うのは４番目の語（句）というルールで統一されている。日本語とフランス語の間の発想の違いが問題のポイントになると難易度が上がる。そのような問題に当たる問１，問５にしても，主語が提示されていることで，基本語venirやfaireを丁寧に扱えば正解に至る。全体的に，基本的な表現の出題だったと評価する。

第７問　情報処理能力を問う出題で，与えられた情報から判断し発信できるか問われている。

Ａ　「中学生同士の手紙」を読み取る問題であった。平易な表現であった。

Ｂ　「コンテストの募集要項」と内容に関する会話文が出題され，応募の条件を読み解く必要があった。情報を適切に整理できる落ち着きがあれば，解答は難しくない。

第８問　文意を捉えられているかの理解レベルを細かく測れる長文読解問題である。全体の中では元々配点も高く重視されているが，従来よりも更に配点が10点増えた。

今回は「パリで増えるミツバチの巣箱」が題材だった。都会で蜂蜜採取する意外な利点や環境保護対策（教育）へ利用する視点など，新鮮な話題に受験者は関心を持って取り組んだことだろう。問５の選択問題は，「本文中に示されていないもの」を選ぶというところで詳細な読解が必要であった。情報を読み解くに当たって一般知識が通用しない題材選びも，結論部の要約を選択させる設問も，問題作成に工夫のある良問であった。

３　結　　び

例年どおり難問奇問はなく，発音，語形変化における不規則なものについても，当然知っておくべき範囲内にとどまり，またフランス語の運用能力を幅広く問うという点でも，これまでのセンター試験を踏襲した問題作成であったと評価できる。

前文で触れたように，今回のテストでは出題順が一部変更された。あらためて全体を見ると，「発音→語彙→基本文法→連語・構文→対話文→整序作文問題→実用的文書の読み取り→論説的文書の読み取り」という展開になっていることが分かる。これは，外国語学習のプロセスを反映しており，最終的な目標が第８問に設定されていると考えることもできよう。また，出題順の変更によって，そのような一連の流れがいっそう明確化されたように思われる。

今年度，受験者数が若干減少しているが，はっきりとした理由は不明である。ただ，昨冬以来，いまだに続く，おそらく人類史に刻まれるであろうコロナ禍の影響もそこにあると推測することは不可能ではない。昨今の入試制度の多様化により，早期に大学から入学許可（合格）の通知をもらえるケースがあるが，仄聞したところでは，そうした生徒が，新型コロナウイルス感染リスクを懸念し，予定していた共通テストの受験を取りやめるということもあったようだ。こうした事情により，例年であれば，自らの実力を知るために受験していた層が不受験となった可能性もあることになる。

受験者数減に触れたのは，このことがフランス語の試験そのものの存続に関わるのではないか，という懸念にどうしても結び付いてしまうからである。

ここまで見てきたように，今年の共通テストにおいても，高校生の学習状況を踏まえた上で，多方面の分野からバランスよく出題するという方針の下に作成された結果，識別力の高い問題がほとんどであった。これだけでも，問題作成の難しさは容易に想像できる。

その上で，今後も「フランス語」の共通テストを存続していただくようお願いするものである。ここ数年，大学の入試個別試験から「フランス語」をなくすという一方的な知らせが相次ぎ，さらに，共通テストの受験者数の少ない一部科目の存続を検討するなどの議論がなされている報道を目にするに至り，高校の現場では戸惑いを隠せないでいる。

フランス語を習得する現代的意義を３点挙げたい。①グローバル化という言葉が使われるとき，多くの場合それが英語化を意味する日本において，「真の」グローバル化を目指すためには，英語以外の外国語学習が必須となろう。国連の公用語であるフランス語は，グローバル化のツールにふさわしい。②若者の海外離れの傾向を耳にするが，内向きの日本に未来はない。２つ目，３つ目の外国語学習に取り組む知的好奇心に満ちた高校生こそが，将来を担う人材として不可欠の存在である。フランス語学習者も，もちろんその一翼を担う。③今後の世界は，ますます多文化共生が当たり前になっていくと思われるが，そうした大きな潮流にあって，共通テストの外国語試験が複数の外国語から選べることは，日本の社会から世界への大きなメッセージになるはずである。ヨーロッパを代表する言語であるだけでなく，歴史的・文化的に世界に広く影響力をもつフランス語は，と

りわけ象徴的な意味を持つ外国語と言えよう。

さらに言えば，英語に加えて，それ以外の外国語を学ぶ生徒には，十分な忍耐力と知的好奇心が要求される。そうした生徒を迎え入れていただくことで，大学に一層の多様性がもたらされることを願うものであり，また，高校の現場にいる教員として，フランス語選択者にユニークな生徒が少なくないことを実感している。現在フランス語を学んでいる生徒にとってだけではなく，将来のフランス語学習者のためにも，大学教育の入り口として共通テストを今後も実施・利用していただきたいと切に願う。

第２　問題作成分科会の見解

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　英語以外の外国語については，大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し，「リスニング」テストは実施しない。

○　教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。

また，実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面，状況の設定を重視する。

○　問題作成に当たっては，CEFR 等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。

その際，大学教育の基礎力を踏まえ，また，高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し，問題作成を行う。

２　各問題の出題意図と解答結果

これまでの大学入試センター試験における問題作成の大枠と良問の蓄積を受け継ぎ、基本的知識を問う問題と思考力・判断力・表現力等を問う問題のバランスを配慮し、従来の問題の数、配列、配点を見直した。具体的には、語彙問題の数を減らし、設問形式も語彙知識を直接問うものから語句の用法に基づいて正解を導くものに変更し、語彙問題減少分を読解問題に重点化して配分した。また、大問の配列を、発音、文法、語彙・表現、整序作文から意味内容、読解へと問題の漸進性に配慮して変更した。

なお、フランス語の表記は従来の正書法に従っているが、近年フランスの学校教育に導入された新たな正書法と齟齬が生じないよう配慮した。

第１問　発音問題

つづり字の読みを通して，「聞く，話す」能力の基礎となるフランス語の発音に関する基本的知識を問う問題である。つづり字と発音の関係の理解度を試すために，できるかぎり多様な出題を心がけた。語の選択に当たってもなるべく多様なものとなるよう心がけた。リエゾンについての知識を問う問題では，語句レベルのみならず，文中でのリエゾンも積極的に扱うこととした。基本的な発音の規則を正確に把握していれば容易に正解に到達できるものと思われる。

問１は «ai»,«ei» の発音を問う問題であり，正答率が高く，識別力も十分であった。問２は«u» の発音を問うもので，正答率が高く，識別力にも問題はなかった。問３は語末の«d» を発音するかしないかを問うもので，正答率が高く，識別力がよく出ていた。問４は語末の«r» の発音を問うもので，難解な問題ではないが正答率が低くとどまっており，意外につまずきやすかったようである。問５は例年どおりリエゾンを問うものであった。正答率は高く，識別力にも問題は認められなかった。

第２問　語形変化の問題

語形変化を文法・語彙・発音の知識と関連付けて問う複合的問題である。できるだけ多様な品詞・発音にわたって出題するよう配慮した。高校側の意見を尊重しつつ，文法，発音，つづりに関する基礎的な知識を広く試すよう努めた。

問１はsourireの過去分詞を問う問題であった。正答率が８割弱ととても高く，識別力も十分な問題となった。問２は形容詞précisから副詞précisémentを問う問題であり，やや解きにくい問題であったのか，正答率は約４割と低かった。問３は動詞habituerから名詞habitude を問うもの

であり，正答率が約７割と高かった。問４は動詞admettreから形容詞inadmissibleを問う問題であったが，正答率は３割強とやや難しい問題であった。問５は形容詞rouxの女性形を問う基本的な問題で，識別力は十分であったが，正答率は３割弱と低かった。

第３問　文法の問題

文法に関する基本的知識を問う問題である。基本的な文法事項を，偏ることなく，広く問う多様な問題の作成を心がけた。また，他の問題と同様，問題文についても，実際に使われる自然なフランス語になるように配慮した。

問５は動詞repartirの後に動詞の原形を求める問題であるが，正答率がこの大問の中で最も低い問題であった。しかし，識別力は低くはない。関係代名詞を問う問２，動詞の活用の問題である問３，冠詞を問う問４，文頭の疑問詞を問う問７は，正答率は高かった。代名詞を問う問１と比較表現を問う問６は正答率が５割程度であったものの，成績上位層はよく答えられており，識別力の高い問題であった。

第４問　語彙・表現の問題

基本的な言い回しや慣用表現・熟語に関する知識を問う問題である。語句の意味を直接問うのではなく，与えられた文脈の中で語句の働き・用法を理解しているかどうかを問う問題とした。

全体として正答率はよく，識別力も十分であった。特にse porterの意味を問う問１，熟語à votre placeを問う問４，そしてsinonを選ばせる問６は正答率がよく，識別力がある問題だった。「負っている」devoirを問う問３は正答率がやや低かったものの識別力は出ていた。en coursを問うた問２では，正答率はやや低かった。ennuyéeを選ばせる問５の正答率は高くなかったが，識別力には問題がなかった。

第５問　対話完成問題

与えられた会話の一部から，日常生活における自然な状況を判断し，対話を完成させる問題である。具体的で想像しやすい場面や状況を設定しつつ，内容が多様なものになるよう心がけた。また，できる限り明解なフランス語による表現を採用した。さらに，会話の一部だけを読んで正答を導くことができる問題ではなく，会話全体を読まなければ正解に至ることができない問題を作るようにした。

問１は正答率が高く，容易に正答に到達できる問題であった。問２は，問１と同様に，正答率が高かった。問３は正答率が最も高い問題であったが，誤答である②，④を選んだ受験者は，« tant mieux »を理解できていなかった可能性が考えられる。問４は識別力が高いものの，正答率が先の３問より若干低かった。しかし，誤答も分散しており，バランスの取れた問題であった。問５については，識別力はあったものの，正答率は約４割にとどまった。その理由として，正答に含まれる表現，« changer les idées »の理解が難しかったため，誤答を選んだ受験者が多かったと考えられる。

第６問　整序作文問題

例年の出題形式・傾向にならい，日常的で平易な日本語を，基本的な語彙・表現によるフランス語に言い換える能力を見る問題である。整序作文の形式により，与えられた語句を用い，自然なフランス語の文を組み立てる力を問うている。問題の日本語文は，自然でありながらも，正答を導きやすいものとなるよう配慮した。

正答率と識別力を考慮して，下線の数を６か所とし，偶発的な正解を排除するようにした。

問２，３，４はいずれも正答率が高く，識別力も十分にあった。問１と５は無生物を主語に据えた文だが，venirやfaireを理解していれば正答を導くことのできる，適切な難易度の問題で

あった。問５については，faire A de Bの構文がやや難しかったようで，誤答を選択するケースが多く見られた。

第７問　資料・会話読解問題

図表等を用い，日常生活や身近な問題に関連したフランス語の知識・能力を問うとともに，それに基づいた思考力・判断力・表現力等を試すための問題である。高等学校学習指導要領の改訂を踏まえ，高校生にとってより自然でなじみやすい内容となるよう心がけた。また，図表等を用いた資料に基づく適当な分量の文章または会話を取り上げた。ＡとＢの中間に分かれ，別々に示された図表と会話を関連付けながらフランス語の資料を読み解く能力が求められている。Ａは「中学生の手紙」，Ｂは「日本語インタビュービデオコンテスト」を読み取る問題で，バラエティのある出題となるよう工夫をこらした。

Ａについては，受験者が親しみやすい題材であり，全ての問題において識別力があった。資料を正確に読み解けば正答に至ることのできる比較的平易な良問であった。

Ｂについては，おおむね正答率が高く，識別力も保たれていた。問４についてはほとんどの受験者が正答しているものの，全体では識別力が保たれていた。

第８問　長文読解問題

論旨が明快で論理に一貫性のある文章を素材として選び，事柄の因果関係や対立などを正確に読み取る力や，文章の流れを論理的にたどる力を問う問題である。近年の方針を踏襲し，高等学校学習指導要領の改訂に対応すべく，なるべく平易な表現，なじみやすい題材を選択するようにした。そのため，本文が複雑になって，論旨が取りにくくなることのないよう十分に吟味した。常識だけで正答にたどり着けるような問題や，単語や成句の知識を問うだけの問題は排除するよう心がけた。また，文章の流れに沿って内容全体の把握ができているかを試す問題を取り入れた。そのために，文章は語彙・文法的に難度の高いものを避けて，より明確に思考力・判断力・表現力等を問うことができる問題となるようにした。

第８問は全体的に見て，識別力のある良問であった。問１・問２は文脈を正しく理解した上で語彙を選択する問題であり，いずれも正答率は約６割で，識別力も高かった。問３も識別力のある問題であった。正答率が約５割にとどまったが，本文を丁寧に読めば，先入観にとらわれず正答できたものと思われる。問４の正答率は７割台半ばで，識別力も高かった。問５の識別力がやや低かったのは，本文の内容と一致しないものを選ぶという問題形式によるものであろう。問６は結論部を要約するという新しいタイプの問題形式であったため，正答率が５割台半ばにとどまったが，識別力は十分にあった。問７は本文の内容と一致する文を６つの選択肢から２つ選択する問題である。正答率は約５割で，比較的難度が高い問題であった。誤答の④を選んだのは，本文の読解ではなく一般知識を基に判断したためと考えられる。問８は本文のタイトルを考える新しいタイプの問題形式であった。正答率は５割台半ばにとどまったが，本文の大意を正確に把握できた受験者ならば，２つの選択肢に出てくるdangerという語に惑わされることなく正答できたものと思われる。

３　ま　と　め

以上，高等学校教科担当教員から寄せられた意見，令和３年度の「フランス語」の出題意図，問題形式と内容に触れながら，解答結果を分析検討し，問題作成部会としての見解を述べた。

今回は大学入学共通テストにかわって最初の試験であったが，識別力の高い問題が多く，全体として幅広い受験者層に的確に対応できており，平均点も例年と大差はなかった。今後も試験の目的に鑑み，高等学校における学習範囲を逸脱しない適切な出題内容を心がけつつ，極度に難易度の高

い問題や，出題傾向の偏りを避ける配慮を今後も継続していきたい。

試験問題に対しては，高等学校教科担当教員の方々をはじめ各方面から有益な意見を頂いた。あらためて感謝する次第である。